

# F ACULTY D DEVELOPMENT

## I N V I T A T I O N

山梨大学教育人間科学部

第 14 号

Jun. 3, 2005

---

### － F D ワーキンググループから学部 F D 委員会へ－

本学部の F D ワーキンググループが発足したのは 2002 年 4 月のことです。以来、「初任者懇談会」(3 回)、「授業研修会」(10 回)、アンケートの実施、「FD Invitation」の発行(13 回)を行ってきました。F D ワーキングのスタンスは「上から下への F D ではなく、下から上へ向かうような F D」「日々、足下を見つめ、大学教育のあり方を見つめていく」というものでした。この 4 月から学部 F D 委員会へと衣替えしましたが、初心を忘れずに今までの活動の蓄積のうえに継承発展させていきたいと考えています。

本学部 F D 活動のこれまでの蓄積を振り返る意味で、発行された「FD Invitation」の中から印象に残った言葉をほんの少しだけ拾い集めてみました。

☆自分が学んだプロセスと同じものを学生に与えても、教育活動はうまくいかないものである。

学生たちは自分と同じようには育たないのだ。H 氏

☆概論に徹し重要概念を浅く広く指導すべきか、本質的な論点を含む具体的事例を学生に提示し実際に学生に考えさせる狭く深い指導をすべきか、という問いは教師にとって究極の課題である気がします。T 氏

☆これまで以上に、大学教員が教育にコストをかけることは必要であろう。とはいえ、研究偏重主義から、振り子が大きく振れすぎて教育偏重主義になりすぎることはやはり問題だ。O 氏

☆各授業を通じて実質上認定される教職資格の正当性を担保(説明責任)するため、教育活動はどのように行われるべきなのか。S/T 氏

☆個性豊かで自由な大学教育は思考力を育て、画一的で強制的な受験教育は忍耐力を育てる。どちらも教師に不可欠の資質である。I 氏

## —初任者懇談会開かれる—

平成 17 年度の初任者懇談会が 5 月 25 日（水）の午後開かれました。堀学部長のあいさつに始まり、貫井学長からは本学の現状について説明がありました。キャンパス散策（原庶務係長）を間に挟みながら、法人職員の服務（大堀人事課長）、入試概要（菅沼入試委員長）、FD 概要（石垣 FD 委員）、電子ネットワークの使い方（原庶務係長）、外部資金・科研費（山名国際研究協力課長）などについて説明が続き、最後に意見交換を行いました。こちらの不手際で休憩なしのハードスケジュールでしたが、参加者には熱心に聞いて頂き有意義な懇談会になったと思います。

暑い中を長時間にわたり参加していただいた初任者の皆様、お疲れ様でした。また、説明の任に当たられた皆様にもこの場を借りてお礼申し上げます。 (M)

初任者の皆様には懇談会の感想を書いていただきました。

附属教育実践総合センター 澤登 義洋

母校山梨大学に 30 年ぶりに戻ることになりました。そして、約 2 ヶ月。新しい環境に戸惑いながらも、いろいろな先生方に教えていただきながら日々過ごしています。そのような中、今日研修を受けさせていただき、今大学が直面している課題や厳しい財政的状況、そしてそれに対する取り組みや方策についてお話をお聞きすることができました。今日の研修をひとつの区切りとして、また気持ちを新たに組み立ていかなければならないと感じました。

基本的なサービスや制度等について、また、パソコンのネットワーク関係の具体的な活用方法について知ることができたことも、たいへんありがたかったです。また、部屋の中だけの研修ばかりでなく、キャンパス散策ということで、普段見ることのできない場所に案内していただきました。T 号館の屋上からの眺めはなかなかのものでしたし、総合情報処理センターの中核やマルチメディア多目的ホールの最新の設備も見ることができました。この時間をもう少し長く取っていただけたらと思ったのは私だけだったのでしょうか。

たいへんお忙しい中、私たちのために貴重な機会を与えていただいた FD 委員会の皆様に心から感謝します。ありがとうございました。

国際文化講座 奥村直史

着任して約 2 ヶ月の間、まわりの先生方および職員の方々にいろいろ教えていただきながら、山梨大学での生活によりやく慣れてきたところですが、今回はファカルティ・デヴェラップメントの一環として初任者懇談会を開いていただき、いわばオフィシャルな形での情報の提供、ならびに山梨大学が進んで行く方向性の指針を提示していただき、有意義な 3 時間でした。法人化にともない、研究・教育資金の調達やカリキュラムの改変など対処しなくてはならない問題が多いことを実感するとともに、学生にとってどのような「教育」が有益であるのか、自らに問い直すよい機会となりました。

理科教育講座 宮崎淳一

4 月 1 日に山梨大学に採用され、5 月 25 日に初任者懇談会に出席させていただいた。懇談会ということでどのような内容か直前までよくわからないまま参加したが、新任者に必要な山梨大学に関する情報を提供・解説していただき、実に有意義であった。給与関係で単身赴任手当ては自己申告制だということを初めて伺い、翌日急いで手続きした（4 月までさかのぼっていただけなのであるか？）。このような会であると知らなかったのも、受動的に参加してしまったのが少し心残りであった。例えば、メールアドレスの取得の仕方とか新任者が大学のホームページに登録記載しなければいけないことなど、具体的に教えていただくこともできたのではないかと感じた。また、外部資金を本学の教官がどのようなところから得ているのか、山梨県内で助成金をどのような機関がどのような時期に公募しているかなどのリストを提供していただくこともでき

ただろうと思った。また、私の場合赴任してから2週間も外線の電話が使用できなかったこと、2か月たっても身分証がもらえないことなどの疑問に関しても、今後本学に赴任する方のためにもお伺いしたいこともあった。いずれにしても、前の大学ではこのような機会は全く設けてもらえなかったので、山梨大学の温情を感じることができ、非常にありがたいと思った。また、新任者が新しい職場での仕事を円滑に進めることができるようFDとしてこのような機会を提供することは今後もぜひ続けていただきたいと感じた。

音楽教育講座 手塚 実

去る5月25日、「初任者懇談会」がJ号館5F特別会議室で開催された。大学というところに30年も在籍していた者にとってこの「初」という活字に少々の戸惑いを感じていたが、その活字を「山梨大学新任者」と置き換え、できるだけ「初々しい」気分で当日の参加を心がけた。

独法化以前の国立大学は良くも悪くものんびりしていた。教官（教員）も学生もどこか鷹揚としていた。学究生活の大半をその雰囲気の中で過ごした者にとって現在（いま）は時に息苦しささえ感ずることも多かった。しかし、この日の学長、学部長のトップを預かる人間としての言葉に現実を直視する必要性を感じた。

また、この日、公用で中座しなければならなかった私に対し、廣瀬先生をはじめ委員会の方々から頂いた温かさは身に浸みた。定年まであと10年を切ってしまう小生だが、どのような局面になっても温かさを失うことのないよう任務を遂行しようと決意を新たにしたい懇談会であった。

美術教育講座 平野千枝子

初任者懇談会では、法人化後の変化について、国際研究協力センターの活動、入試の種類やスケジュールなど、有意義なお話を伺うことができました。特にイントラネットの紹介は有り難かったです。IT化による情報格差を痛感・・・というより私のリテラシーの問題ですが、着任時に、ネットワーク内でできること、しなくてはいけないこと等全体の見取り図を教えていただけたら大変助かったと思いました。

気楽な意見交換の場として設けていただきましたが、日常気にかかっているような疑問は、細かいことが多くお尋ねできませんでした。まだまだ右往左往していますが、今回教えていただいたいろいろな入口から、アクセスしていきたいと思えます。



## 自分の中の「大学」イメージを毀す

学校教育講座 寺崎 弘昭

一人ひとりの教員が大学教師(University Teacher)としての自覚を確立するというのがFDの目的だと思いますが、それは具体的には、一人ひとりの教員が自分のからだの中に巣食ってしまっている「大学」イメージを不断に毀すということに尽きる、といつも思います。

大学の教員になっ(てしまっ)た人々の大部分は、幸か不幸か研究者養成の課程を修了して、研究者の副業として「教師」もやっている(つもり)、というのが実情です。だから、大学「教師」に転生するというのは並大抵のことではありません。それに、自分が大学で受けた授業のイメージで、大学の授業とはこういうものだ、大学とはこういうものだ、という抜き難い固定観念に囚われているわけですから、いかんともしがたいと言わねばなりません。

その典型が私で、大学の授業というのは、その教師の最先端の知見を、筋道立てて静かに、あるいは滔々と、あるいは情熱的に語り尽す、そういうものだとして卒業時に既に思っていました。それは、講義(lecture)というものが、ラテン語 lectio—詠み上げる—に由来し、実際にもともと註解・テキスト等を詠み上げるものだったことから来ています。だから、日本の大学でも、その教師の最新の論文草稿を詠み上げてそれを学生が筆写していくということが行なわれていた、と聞いています。そのようなチャンスを享受できる場所が大学だというわけです。それがいわば「演舌」(speech)調に砕けていったものが、さきの私の大学の講義イメージだということになります。

私の場合、転機は、群馬県の保育者養成の短期大学に転出した時に否応なく起こりました。

そこで私を迎えてくれたのは、茶髪・マスカラ・ピアス(鼻・唇も)・厚底靴それに顔黒・ミニスカートの、男女関係のもつれに悩み、なんとか小遣いは自分で稼ぐ、私などよりはよほど生活力の旺盛な、高校を卒業したばかりの学生たちでした。最初はどうか接していいのかもわかりませんでした。親しげに「寺ちゃん」と呼びかけてあれこれ話してくれる学生たちと始終一緒にいるうちに、彼女らが一様に保育者になりたいという熱意では誰にも負けないということだけは、よくわかりました。この子らの熱意に応えたい。心底そう思うようになりました。

不思議なことでした。私はそれまで、学生を可愛いとったり、「この子ら」と感じたことはありませんでした。ましてや、「この子ら」のためにその熱意に応えたいと思ったことはありません。

私の授業は、二ヶ月も経たないうちに、まるで変わりました。

この子らが保育者になるために、そして保育者になったときに、絶対に必要な知識もしくは論点を厳選しました。そのために新たに、就職試験の過去問も網羅的に集め勉強もしました。そして、これだけは、という知識・論点を1回の授業で1-2個と定め、時間内にそれだけは全員に習得させるように1回1回の授業を構成しました。飽きさせまいと、教室にOHCやプロジェクター設備を完備してもらい、できるだけ視覚資料を多用しました。まだそんな稚拙なものだとはいえ、私の講義はそのとき、講義ではなく業を授ける<授業>になった、と思います。

しかし、ここに来て、またぞろ元の講義に戻りつつあります。人間、習性は抜き難いものようです。だがそれは、眼の前の学生のすがたがまだ私に見えてきていないためだと思っています。それさえ見えれば、そして私の役割が自覚させられれば、私はまた学生に応えたいと願う「教師」になれる、と信じています。一度は「教師」になれたわけですから。

次のエッセイは、ソフトサイエンス講座の鈴木俊夫先生にお願いいたします。